

812-1 (2)

俳諧資料カード

年代

文政10

編者
(筆者)

馬有

書名

冠付虫眼鏡

備考

(下垣内蔵)

はりし祢序



冠^{かんむり}附^{つけ}場所^{ばしょ}のくさぐさ^{くさぐさ}と^と木^きの
お一^{いつ}社^{しゃ}も^も詞^{ことば}の^の俚^り俗^{ぞく}も^も
も^もか^かの^の向^{むか}上^{うへ}の^の一^{いつ}路^ろも^もあ^あら^らじ
も^もや^やさ^さし^しい^いも^もの^の家^{いえ}も^も
を^をち^ちら^らば^ばき^きは^はい^いえ^える^るわ^わら^らい
か^かも^も一^{いつ}方^{かた}井^いの^のい^いま^まも^も
お^お變^{へん}建^{けん}を^をは^はら^らい^いま^まも^も
お^お中^{ちゆう}の^の優^{ゆう}な^なも^もや^やら^らい^いま^まも^も
さ^さわ^わら^らい^いま^まも^もや^やら^らい^いま^まも^も
お^おの^の目^めも^もや^やら^らい^いま^まも^も

白竹の便玉^{しらたけ}の^{うしろ}うしろ
あはれあまの^{うしろ}うしろ
あはれあまの^{うしろ}うしろ
あはれあまの^{うしろ}うしろ
あはれあまの^{うしろ}うしろ
あはれあまの^{うしろ}うしろ

ふは九申年
宇神 卯月

ふは九申年
井菴徳

附附は月鏡

芳井馬宮送

今^{いま}新^{あらた}祝^{いわ}し^ま冠^{かん}附^つ揚^{よう}附^つ
折^おり^り連^{れん}合^がな^なと^とく^くさ^さど^ど
は^はり^りし^して^て世^よの^のぬ^ぬ人^{ひと}名^なを^を
あ^あく^く月^{つき}の^のし^しめ^めを^を
い^いふ^ふは^はら^らに^に然^{しか}る^る又^{また}和^わの^の
も^もぐ^ぐは^はら^らに^に入^いる^るを^を
も^もを^を附^つ方^{かた}な^なに^にい^いは^はる^るを^を

けのいふ人ともて
 又ハ只 龍魂^{りゅうこん}をいふは只^{ただ}に
 とりざつてあつて
 けぬ人ともて
 かく付けり口合^{くあひ}多^{おほ}くとも
 才^{さい}智^ちなりくしてハ出^でが
 何^{なん}まの筆^{ふで}はたしてのふ
 なまきえとてハ
 けけり付^つけり
 とてあつて

へんちひと東ぐさぞ
 出来ざるものにてはそよ
 振ぐ人よ世上の義理も
 明くふたり方のおどろ
 け居るやにあり又別
 世かきと平生は拵ぬ
 又字るやぬえよりあり
 勢況とくもは傳奇の
 流りて人な石なぐ
 名はをきふとくを袖と

廣く^{ひろく}世界のるゝといふを
 およそ名附む所のづゝ
 といふも、
 此をいふなり

一 おんおんの省かみハハの意い敷ふ止とべ

しきりてふとまゐる

事を先づ

もりの為から付の案^{けん}方

一ツ二ツ 狐左子河了次

題
約ツて並キ

吾輩はあやうきと附々

なりおし時より先^う足^ぶ

意はさへて、
此を

とくは物づくしに

あやめがきふた

そいふ人へ
輕^{うそ}く釣て

五
キ
ひ
ひ
ハ
紙え袋がらを
鉛えん

乙未年
 佐
 橋
 古
 名

吾門は初教を初とせ

又ハ口板を納ぐるを

人は物を頼む返事

あつものに釣く草といふ
事なり又ハ魚は釣てをま
やん海を釣く草といふ
釣てをまの歌をいひ
しづりまうる化をま
歌 廣なり
お歌 唐あつて世が廣
なる或ハ坊が廣なる因が廣
なるがしづり 瘦く身幅が
廣なるといふく歌の心と

さぐ海なり

題 かゝあつて

おかくちつていふ歌或ハ
およのかとつていふなり
又ハいふのかとつていふ
より外にかななりといふ
あり是がかななりといふ
なり魚肉のいふかななり
なりより人の腹なるいふ
かななりといふなり

あまのりやとてくちや
かゝるも四人の宿るぬ
まはるるを他へ
一通りの所へ大抵なり
いふはかゝる所でのこと
乃ちあるがごとく事をつ
けしは此の如く二三
しるは
かゝるなり

美人の宿る本宿店

此句、則ち笑のかゝるなり
まゝをわいふなり
かゝるなり

衆の役する誠は衆子

この句、かゝるなり

衆子衆のそんがなり

でたぬは衆の役なり

かゝるなり

かゝるなり

衆の汁を吸ふ宿屋

かのうはかりをまのりては
 かりとてたしかまのこめ
 ひとりかきとる川に内を
 考へ仕ふるまをひきあへ
 歌うし移う

此題ハ先^い誰^{たれ}モモ^もア^アモ
カ^カシ^シル^ル者^{もの}ハ^ハ女^め形^{がた}家^けの
ア^アハ^ハシ^シル^ル者^{もの}ハ^ハ女^め形^{がた}家^けの
ハ^ハハ^ハシ^シル^ル者^{もの}ハ^ハ女^め形^{がた}家^けの
ハ^ハハ^ハシ^シル^ル者^{もの}ハ^ハ女^め形^{がた}家^けの

後

お茶汲で出た呉服店
 是等より案ずる所
 茶汲で出た正面
 高へんが通係なり
 高へんが通係なり
 付く上子の作あり

一 句 くみ 作 しる 不 しる 報 しる 向 しる よう 入 しる る 句

白の餅さまでいさう白の
まぐさいふ一ツ二ツあるを

一ツもの喰うさう

即ち廣田吉ね毛剃

あまうハ髭白より入半所

白より入半

風居あまう

米屋がかり心能女房

是ホいふより入る白より

あまう入り

物の菓つと綿織り

あま理屋より入る白より

たあまうと

近剃がきるあが禪

あまうよりあまうより

ぬう

あまう介白化より

おんのあまう二はきり

あまうよりあまうより

見立取よりあまうより

くそれただうせいなり

當麻

當麻

當世

唐人

審椒

湯治

豆腐

荅

右に記たの如きより

冬至

冬至

燧人

同 扱

右に記たの如きより

柑子

上中

香

隣

耕

辛

合

買

新

有

孝

馬

庚申

右に記たの如きより

假

江

紅

乞

口

太

右に記たの如きより

遠

祈

祈

祈

細

細

申

申

申

申

扇

扇

扇

扇

扇

扇

と

と

と

と

と

と

あ

あ

あ

あ

あ

あ

と

と

と

と

と

と

あ

あ

あ

あ

あ

あ

あ

あ

あ

あ

あ

あ

近江 此字はふがふと

りふふのうゝの略かゝる

わふふのうゝ

第 この字もはふとふ

綴ふふのうゝの略かゝる

養子 此字も中ふと

りふふのうゝの略かゝる

相場 お遠 この字

はふふのうゝの略かゝる

ふふふのうゝの略かゝる

底 障書状上

ちふふのうゝの略かゝる

はふふのうゝの略かゝる

りふふのうゝの略かゝる

ふふふのうゝの略かゝる

一 句代にせんとおふふの

先主生ふはふふのうゝの

ふふふのうゝの略かゝる

ふふふのうゝの略かゝる

ふふふのうゝの略かゝる

とも集冊とあるものにあ
 向する為より此の意を
 ありの姿にあらわす
 ところとして自分の功者と
 ふ功者といふは先づ大
 多く見えておる時ハ自ら
 名をいふ事あるものなり集冊
 是近ね多きことどもは
 かるものなり當時流行の
 宜まると集左よりなり

題次例

- 一 いさぐし 二 今から
- 三 いまより 四 今から
- 五 一向なる 六 去下来て
- 七 入利き 八 いまより
- 九 今から 十 入利き
- 十一 毛付て 十二 論より
- 十三 胃が面を 十四 けりき
- 十五 毛付て 十六 けりき

十七 二三 なハ 十八 近きんぞ

十九 海むろー 二十 参よはて

廿一 宝まろー 廿二 ほぞめて

廿三 へいふそ 廿四 魚ざり付キ

廿五 飛んで来て 廿六 そりが来て

廿七 とのなり 廿八 とと見て

廿九 そくんと 三十 ぶぶが仕込

卅一 何おでハ 卅二 とばちで

卅三 ちと照じや 卅四 近付イ

卅五 ちよんのほ 卅六 遠くは

卅七 りづり 卅八 流くで

卅九 めざりけ 卅十 めりそ

卅一 めりそと 卅二 めまを

卅三 愚よ名セ 卅四 常解

卅五 めざりハ 卅六 おりま

卅七 おりそと 卅八 免が

卅九 おりそと 卅十 おりそ

卅一 けろと 卅二 けろと

卅三 橋し 卅四 橋子

卅五 かぐり 卅六 かみん

金

五十九 とうんせり
六十 とうりき

卒一
 四
 卒二
 三

六五
 六五
 六五

卒五 五
卒六 六

七
 抱合花
 八
 々々々々

卒九
 立_テ物_ト也
 七十
 大_ニう_ナ

① 太^ドの^コや
 ② たる^と一^と

三
テ
四

十五
 十六
 十七
 十八
 十九
 二十

⑦ 七
七
七

⑧ 八
八
八

車九
五
十
六
七
八
九

全一 讀んで 全二 附録

全三 つくもひと也 全四 貴かま

(半五) 附ツキ 添ソフ 以テ
 (半六) 急ウツク 以テ

(全七) 何々何々
(全八) 何々何々

全九何^なが^は品^{しやう}九^く
 訓^{しやう}下^げ来^きて

九一 何と云
 九二 何と云

五三 来 来
 五四 来 来

五
 月
 日
 六
 日

百七 是ハミツル 百八 夜でせ口

百九 別カド 百十 是切トヤ

百一 是ガ極ヤ 百二 夜多でも

百三 照ルル 百四 是と廣ハ

百五 傳授もの 百六 出ル入ル

百七 天狗ハガリ 百八 是の部で

百九 人ガリト 百十 是ハミツル

百十一 是ハミツル 百十二 是ハミツル

百十三 是ハミツル 百十四 是ハミツル

百十五 味付ケテ 百十六 是ハミツル

百十七 作ホツク 百十八 是ハミツル

百十九 是ハミツル 百二十 サアなミツル

百二十一 是ハミツル 百二十二 是ハミツル

百二十三 是ハミツル 百二十四 是ハミツル

百二十五 是ハミツル 百二十六 是ハミツル

百二十七 是ハミツル 百二十八 是ハミツル

百二十九 是ハミツル 百三十 是ハミツル

百三十一 是ハミツル 百三十二 是ハミツル

百三十三 是ハミツル 百三十四 是ハミツル

百三十五 是ハミツル 百三十六 是ハミツル

頁七 咄^{はな}出^でる 頁八 さんく^{さんく}と

頁九 沖^お込^ごみ^みの^の 頁十 切^きぬ^ぬが^が勝^{かち}ち

頁一 ゆ^ゆら^らり^りと 頁二 指^{ゆび}さ^され^れる

頁三 タ^タベ^ベの^の 頁四 服^{ふく}を^をひ^ひで

頁五 女^めま^まし^しる 頁六 足^{あし}を^をう^うく

頁七 足^{あし}を^をう^うく 頁八 尻^{しり}を^をう^うく

頁九 ち^ちび^びす^する 頁十 沙^さを^をう^うく

頁一 ち^ちび^びす^する 頁二 辛^{しん}や^やノ

頁三 尻^{しり}を^をう^うく 頁四 辛^{しん}抱^だせ^せる

頁五 ち^ちび^びす^する 頁六 心^{こころ}月^{つき}を^を

頁七 エ^エラ^ラお^おぐ 頁八 あ^あう^うい^いく

頁九 エ^エラ^ラお^おぐ 頁十 ぬ^ぬえ^えみ^み入^いり

頁一 ぬ^ぬえ^えみ^み入^いり 頁二 エ^エラ^ラお^おぐ

頁三 あ^あう^うい^いく 頁四 あ^あう^うい^いく

頁五 あ^あう^うい^いく 頁六 ひ^ひつ^つと^とり

頁七 ひ^ひつ^つと^とり 頁八 ち^ちう^うに

頁九 ち^ちう^うに 頁十 モ^モウ^ウあ^あう^う

頁一 モ^モウ^ウあ^あう^う 頁二 モ^モウ^ウあ^あう^う

頁三 モ^モウ^ウあ^あう^う 頁四 お^おは^はい^いと

頁五 お^おは^はい^いと 頁六 お^おは^はい^いと

喉の眼黄ふゆき丹

③ いふふ

友手整つて黄ふ嫁

喉痛 喉のふくふく入

黄ふ嫁の情に工合黄

投りも黄ふで何のあさ

小倉仲士がえせる黄

④ いふふ動ふ

子も黄の黄ふ大百姓

黄ふの喉の後の黄

黄ふの甲黄の黄ふ入

⑤ いふふ

黄ふの黄ふ黄ふの黄

黄ふの黄ふ黄ふの黄

小倉の黄ふ黄ふの黄

黄ふの黄ふ黄ふの黄

⑥ いふふ

黄ふの黄ふ黄ふの黄

黄ふの黄ふ黄ふの黄

黄ふの黄ふ黄ふの黄

連つらが下け早はぬ丸まる水みづあ

⑦ 入い用ようぐ

素つまあさるふ女おんなナガ
意いお釣つりりガゆゆ膏こう文ぶん
鼻はなどけ汗あせを巾きんぬ干かし
仕しを毛けの毒どくがら衣え主しゅ

⑧ いりかても

冬ふゆ屋や連れんる儒にほ者しやの甥おとこ
豚とんと伽かふ入いつと医い
眼め鏡きやうのくま巾きん目め利り

法はふる家具かぐ借かる及および老ろう客かく

⑨ まる本ほんぐ

ろふ表うへ紙しの去いぬ五ご行ぎやう
川かわとけ鳴なる尺しゃく新しん銀ぎん主しゅ
風ふう呂ろふきん飽あく尾お張ちやう客かく
仲なつ士しが法はふる小こ子し供く扱さく

⑩ 入い過かし

糸いと漬ひのまぶい素それぬ主しゅ
葛くわ蒲ふの死しる床とこ友ともの床とこ
親おや眼め落おちる汗あせくふ衣え

嫁へし後迄義理の兄

⑪ いろ付きて

安米こせぬ春日の屋
老免の泣きお宿頼
泣き仕込む紫解屋

⑫ 諭子及むに

色あぢけり藤子の肩
梅えく去ぬん合聲
碌碌の喧嘩退く連士

⑬ 四村が島より

女芸よ実の法所より
噪の泣きと切る脊負
あれ子足はゆき満り
小浩の海へ入る錢り

⑭ けりきり

出入の止まるは橋やど
棟梁の去る新油の灰
おがき供も新田より
涙ぐみ紙のうづね又

⑮ ぶらぶらと

悟し按廣の矢心な妻
揚の掛る拍子うす
鉄砲の鳴る旅芝居
素が秋つぎる殿乃念
鉄砲の鳴る旅芝居
十六 是はうきうきに
石井の陣ある右矢
漲る水が女を
野原を以て走る
十七 二之なる

合はるる急の入る百な
うきなるおとけりな
妻の母は拂ふ松の屋
十八 おまふ
はるる女は祖
拳のおとへ繰る貝
按廣の小使女
十九 げんごう
大なる水は
龍の胎仕る下

小幡肥一と血の鍋
きり出へ急ぐぬ惚上り

二十 哭云子母

おれの夜更をぬき屋中
きり乃具言ふ家兄伯父
二日ふも菓子で減くはあ
序より文の目居る伯母

廿一 宝来う

派利江入とある家法
哭く福来まきの急るま

落し根を泣く寡儒老

廿二 けぞりて

縫屋へ下早るけり子あ

ち代の悪習ふおる院

伯母の借録笑ふ落子

々一交十番整持ッ雑屋

廿三 ハイ／＼

怪気系より文床り

家の貰ひもる旦

返り笑へぬ百乃海

ね織着る毛剃をゆく友

廿四 魚むりつこ

貰ひて来ふとあるお登
屋にハ紀へ起るぬ 留

廿五 飛んで出く

え手失ふ赤かひる屋

おとり子汁はねる下女

かきひかりい旅芝居

白歯が焼く巨煙のふ

廿六 とらふ来く

隣下 絞リ 志が母

子に油取せぬ古金屋

楊乃まゝ 法主

娘へお取ゆける母

廿七 どの屋小

近しお家が借に寄

掛るイ喜へ俺の本戸

子無し伯母 咲女抱の甥

ある銀子 活る水の伯父

妹の乳むる 呵る母

延も来いる絆坊主

⑥ ぶきんても

仕早脊負へ整ふ妻
噪と勢ふある姉屋
女房へ但も小紋帳
泊る乳の無イ文梧子
地深ま本の乳子乃ぬ妻
絆のゆゑに能くま

⑦ くらんぐ

健盗より義理の父

手角おやめ料理屋嫁
幕の中子出を吸屋
親父どんのえり去親父
二百目飲る中風邪
⑧ ぶきんと仕る

近く異世状裂仲在
永頭へかぶる物くま
旦那の去へすひる妻
吸屋も近くくま藝子
⑨ 何んぞ

癪へ緘ぬきを按戸
止めぬ漢好き病む男
牛蒡丁児のぞく床
大酒を呵る伯父の医者
②二 とぞきりて
妹もそとにきや出ぬおどり
ふと別よぬいご後家の下女
やん生駒り勝吹屋の子
結伴喰ふる蒲鉾を
②三 千ト照トヤ

救医が隣とくは綱
竈引をきく漢新造
衣裳着らるる合婦
お日咄の合ふぬ藝子
仕立もの看板出れま

②四 近付いて
裾の皺延き立に医者
床も泣く破換椅
あしとま呵るいごり漢
赤読者ふ馬帽子お

かゝく流るる水は初

⑤ ちよんの石や

居候へて近く石の身

銀酒の口切る料理人

芝居へ這入る文楽中

見合ふ仲人の来り揚子や

仲品を招く料理屑

⑥ 遠くにおちる

系沙うろ度う小娘状

雲より出る月と甲斐

右士の義理は惚る伯父

本妻照して去ぬ若人

琴の音はさくお松羹

貧乏のぶ龍走去又口入

積みえりある松の石

⑦ ちよん石

吟風もさる帰系の後

記と云ふと石女奇

柳津えりある且形

僧落照る夜習ひ子

息子供より出入仲士

⑧ 流しで

麻上戸焼の焼縄屋

外母へ裸よりなる毛判

⑨ ぬきうけ

出端の素湯香を体を支

柳え仕立より月囲に

素次へお織妻より生碎

大馬屋より少殿買

⑩ ぬきうけ

嫁の服より三ツ炭間屋

去佛素揉む反抄戸

若屋天急返く重別

⑪ ぬきうけ

一焼香より辛抱舞

毒素あかしく脊負

組に渡り分出安歩

⑫ ぬきうけ

松に給ハぬ神さ者

素々友へ子やん寡日雇

掛たり ちり ちり ちり

罍 忍小者也

深き 深き 深き 深き

世にけの 忍小者也

居る 居る 居る 居る

浅次 浅次 浅次 浅次

罍 解く

鉄 鉄 鉄 鉄

車 車 車 車

骨 骨 骨 骨

萩 萩 萩 萩

世 世 世 世

罍 忍小者也

萩 萩 萩 萩

味 味 味 味

茶 茶 茶 茶

春 春 春 春

罍 おろす

長 長 長 長

政 政 政 政

是より富立つ場を来ま

四七 おりてテ、

糸の膝寒くチャリ泣く
罪連が多ふと糸やれ根を
明所さぐり床親仁
夜静に文を綴ねん
冬へ侍母の田植唄
糸碗の辞交る親交る王
薪火なる病後平
娘お泣く跡へ後

おづ 形りある張向の礼

四八 是がまうり

お母の妹好む泣く隠居
店友が世話する迷ひる
掛より下はみ取糸のほ
きき苦みせぬ木綿買

四九 おりるも無イ

天山買子ゆき糸買
仲人のチャリと母の代
お母を病み候りの函

世話坊見跡を尋ねる(か)

辛 おりーと尻

中^の多^らへ苦^くの無^い接^はの又
仕^に分^る弟^へ指^もう人^は嫁^よ
着^さる目^へ指^ゆに折^る隠^ひま
風^の為^る主^すさん縁^{えん}辻^づ賣^う
外^はおの^の近^かひ妻^め
出^で店^{てん}へぬ^りと白^{しろ}ねづ^と

壬 ワラとワラ

その髪^{かみ}を此^こ風^{ふう}何^いも辨^は

儒^に者^{しや}も困^まッ^と雙^{しやう}乃^のれ

ま^のさ出^で入^いのあ^る本^{ほん}戸^こ

は^いつ^と冠^{かん}へ指^ゆに折^る隠^ひま妻^め

壬 了くくを

あ^る易^{えい}料^{りやう}傳^{でん}るお針^{はり}

指^ゆに折^る隠^ひま妻^め

米^{こめ}屋^やを好^すきを泣^なく指^ゆに折^る隠^ひま妻^め

お^の山^{やま}ゆ^りお^のと日^ひも^のるの髪^{かみ}

髪^{かみ}を^をる^るを^をる^るの^の無^い

壬 傳^{でん}るお針^{はり}

明^{あきら}の勢^{いきり}のイと^いあ

附^つく機^うあへ^えち^ちる^る案^{あん}以^い

小便^{せうべん}を^を人^{ひと}へ^へち^ちる^るお^お舟^{ふね}

お^おき^きる^るづ^づき^きな^なる^る床^{とこ}

田^いを^を粉^{こな}と^と湯^ゆう^う宗^{そう}合^が舟^{ふね}

そ^その^の度^どを^をち^ちや^やつ^つと^と白^{しろ}の^の目^めや

辛^{しん}酉^う 梳^く子^しか^かう

足^{あし}の^のち^ちを^をぬ^ぬる^る葛^{くわ}蒲^ぼう^うを^を

名^なで^で吸^くひ^ひの^のん^んど^ど猪^ち回^{かい}い^い

お^おど^どり^り子^しへ^へ足^{あし}を^をあ^あの^の三^{さん}味^み

泥^{どろ}利^りを^を土^{つち}と^とあ^ある^る菰^{こも}や

辛^{しん}丑^う か^かぢ^ぢり^りの^のこ^こ

七夕^{せつしち} 助^{すけ}多^たる^る舟^{ふね}大^{だい}二^に

朱^{しゆ}の^の入^いる^る二^に三^{さん}板^{いた}

巨^こ捷^{けつ}の^のぬ^ぬく^くい^い炭^{すす}仲^{なつ}士^し

法^{はふ}沙^さへ^へを^を封^{ふう}換^{かん}を^を蔭^{かげ}屋^や

辛^{しん}未^み り^りみ^みる^る

み^みの^の名^なを^をと^とる^る美^み且^{かつ}那^な

者^{もの}の^の女^をが^が流^{なが}る^ると^と八^{はち}方^{ほう}の^の灯^{あかり}

小^{せう}便^{べん}を^をま^まつ^つ上^{うへ}ハ^ハ機^うを^を

そがつと拵いふ雛ひなのきやうを
臺のりとねといぬる床とこの客

⑦ けしげさせ

足あし系けいしし子こ奴ぬキキ笑わら

奴やつ瓜うり連つととい飛ひ敷しき武ぶ士し

僧そう屋や足あし来きり友とも毛け利り

棟とう梁りやうとい重おもの足あし巾いん幣へい

隠ひん居ぐがい貫くわんとい巾いん歳さい者が

⑧ よろしく 能よいい能えい

小こ判はんななままううろろろろ雨あめ聲こゑ

矢や部ぶで遠とほる孫そん紙しり

摺すりへいといけけ僧そう屋や

周しうとい毒どくで止やむむ陰いん雲うん

そいふい質しつ屋やはは居いりり下げ女にょ

吳ごとい儒にう者しやとい古こ掛か乞き

肉にくとい質しつ屋やはは居いりり下げ女にょ

⑨ よろしく

解ひへい古こ筆ひつとい書しよくく景けい墨ぼくや

介け科かの方かた上うへ氣きとい古こ被ひ

ををろろくくにに孫そんとい質しつ屋やはは居いりり下げ女にょ

子と名所立つ後所の様

卒 ようりく

ちんぷん提ふとん家經

徳おやあぬ 豊 生り

金魚鉢 通く 傳母丁児

卒 よう 旦る

子へ油取せぬ 出合イ介母

三味 替古りや 友仲士

又代の 墨量 卷る 桑屋

輪 替が びんく 一文 凡中

おけ 念丁 児 多し 能屋

卒 能う はまり

陰 可堂 いちり 寺 母度

人中 藝 蘇生 とい 作者

あう七ニワカ 唱る てる士

初胡瓜 夏より 著 仲士

張り 合ふ 子 坐 勝ッ 狂云

卒 よう 似 抄

あふ 三イ 鯛 へ 煮 込 の 服

三井の 紅い じり ぶ ぶ 家

乃丈の氣^きなり王^{わう}令^{しやう}仲^{ちゆう}在^{ざい}
朝^{あさ}森^{もり}寡^{くわ}と笑^{わら}ふ事^{こと}

④ 弱^{じやく}みそめ

罪^{せき}が封^{ふう}切^きる勢^{せい}虎^こ香^{かう}

夏^{なつ}中^{ちゆう}づきとそんが^{うご}勢^{せい}

太^{たい}老^{ろう}尾^びむく勢^{せい}丁^{てう}児^に

赤^{せき}座^ざが活^{かつ}る柔^{じゆう}玉^{ぎよく}を^を表^{ひょう}

⑤ 古^こ集^{しふ}あし

家^け日^{にち}座^ざが提^{てい}る淀^{でん}屋^や搗^う

白^{はく}髪^{かみ}に^に入^いの浅^{せん}とぬき

服^{ふく}の若^{わく}外^{がい}とぬ板^{いた}木^き彫^{ちゆう}

出^で心^{しん}と嫁^{よめ}と入^いる又^{また}

礼^{れい}きせむ指^{さし}ツ古^こ重^{じゆう}屋^や

西^{さい}陣^{じん}座^ざる圍^いにぬ

京^{きやう}仕^し入^いる雜^ざ參^{さん}る女^め丈^{ぢやう}

入^い齒^し座^ざる又^{また}座^ざる又^{また}

⑥ 事^{こと}んかいを

垂^{たる}る屋^やに取^とく親^{おや}仁^に分^{ぶん}

香^{かう}の月^{げつ}可^から事^{こと}の母^ぼ

以^い風^{ふう}屋^や中^{ちゆう}が事^{こと}なり

皆買ヲの並に青のけり
 語人が多し後の事
 口のチ有はひ干屋
 母へ引キ成は吹子自写

⑦ 抱合セ

枯木活久池の坊
 代長おを干ス坂乃下
 家賃並を以て僕口入
 けろはと云てある下話や

⑧ たてうき

素顔いでも土羽干
 揃へてえう賃屋
 身下着お出る格条
 上へ下着りけり
 お家の二葉切る多世
 お家とまがるさのや橋
 碎丹坊立と花の種

⑨ 立テおとや

何うもるま合ぬ伯父
 株と並のけり肥後仲士

和子の脊挫る事の伯母

らくさく酸に下持
姉の性気と揺るな致

⑦ 大さうか

一室の砂奥より女丈

長家とけけとあゝの礼

落チこんとへ居る灸

⑧ 大さの所ぢや

うげおチ諾をさるお屋

清せぬるなとて後家の物

剃る髪何とそりぬる医

又が利落しとて附け

⑨ 大さの一室

又見ふとて又貴きと伯父

粹が淀んどて屋敷町

素が着て見ると深遠に

⑩ 意てやり

魁が服を年忌に代

又てその子自中なるを又

浮くものぬい玉を子

まふまふ子へ情を授

をう無い身の遠に姑

④ ちもくハ

漢傳唐りと泣く古濕

千ヨツと定比が随う縁

逼塞の妻情は一家

内訳子拭持ッ丁児

謡屋情ふおのふ又

⑤ ところふお

塩路りけがきき車

有引女振切るまふ連

膝へ来る乙毛抛る二日

⑥ ちもハハハ

吐くあさささあか

鴨信りけ屋をき

お中へ返るせぬ寡

毛剃が撥つてき毛貫

正去去ナきま質屋

本居ふさす伽お春

まゝこれ 去儀とある 笑

⑦ まゝ 示ハ新ウ

毛羽の眼 五る 櫓の 棟

車座の 孫 出むる 孫

指 足せく ぬる れ 絨リ

母へ 小 声 かなる 倭人

⑧ まゝ 示 示

既 元リが 儒る 笑の 身

仲 成と 破 きて ける 別家

まゝの 義も ーる 殘母

左 所の 伯父も 来る 忘明

⑨ まゝ 示 示

笑 人より 笑乃 操

初人を ーる 丁 兎 本

まゝ 示 示 示 示 示

小 政 情 仗 比 小 女 兒

家 引 示 示 示 示 示

⑩ まゝ 示 示

兄 義人 遠 渡さ 幕 湯

子 巾 洗 井戸の 井 酒

提灯笑ひ人元口入

麦次の碓もする夢子

初めの套る指し渡り

横を上より垂たる矢瀬

綴結布指す法沙の素

⑤ 附き添ふ

子のやうな鼻と切風呂屋

舞子の親乃顔よ夢

飛上り常摩訶思ふ又

⑥ 意に倒し

合羽干城へ来る夕のま

追ひ焚をふふ侍人

柳鈴り助チが割と絆

後家孤高家の追善舎

⑦ 何うの何を

宿習のやうな素れ様荷

出づるゝ婆が役割る利

お茶と指し様人伯母

法よりそとふか父お上

仲居の世話な白歯夢子

父のおうい様日記

父何事やあらぬ

えく来る芝居咄を笑

毎夜又が即く朝の紙

土産を何ぞ母のや

新巻の看板を新巻

父何事やあらぬ

迷ひ子送ぐ来て毛刺

根附沙へ足せる根束木

化老へ来るまを根居

面目を子チャル隠居

素へ趣飲笑ふ父

父訓く来る

嫁もやめて下紐屋

賃屋丁児をせぬやけと

廊の姉の状讀ぬ母

父何事やあらぬ

子士が居るに戒名を

連欠びさん鏡の姿

二月もあつて乃灸

小指をきりて置くかへこ

③ 何おさんなん

まめれもめち握る矢張やせのる士

銘無人へまッ家守やもり

まろりのり見寄る伯父おぢ

隣ッや總先ともナル釣人つりて

③ 来くる年ねんハ

又人またひと雨あめまん辻易者つとえさや

枕へまくら指二本ゆびふた抄ッしり奇

④ 樂がくし也

おろろふおろきうきうる芝居

こころこころ清きよノノ花はなをを拍はく掌しやう次じ

⑤ 何なんふ月安めやす

輝へ時代きよかゝお山

鐸たつの云いひ曲まがの遠とほふ干か

書しよ子し吹ふ交まざる辻易者つとえさや

位くらゐの知しまぬあやふふの奏そう

新あらた撰せんの腰こしハ渡わり居すへ

附つの云いやううの遠とほふふの奏そう

⑥ むろい

利^き目^めの^の人^{ひと}は^は治^ちの^の事^{こと}
既^い痛^{いた}の^の事^{こと}寧^な既^い指^さ
兄^え早^{はや}て^て遠^{えん}入^いる^る儒^{にう}老^{らう}の^の伯^{はく}母^ぼ
七^{しち}月^{げつ}め^め勵^{りき}ム^ムえ^えり^り出^で門^{もん}士^し

⑤七 一^{いち}る^るぢ^ぢや^やテ^テ

大^{だい}本^{ほん}戸^こ遠^{えん}今^け坊^{ぼう}難^{なん}炊^し
お^お店^{てん}筋^{ぢん}チ^ちヤ^やル^る鈴^る按^{あん}廣^{くわう}
出^で米^{まい}仲^{ちゆう}士^しが^が兄^え入^いる^る一^{いち}葉^{えつ}
下^{した}戸^こ冥^{めい}の^の鳴^なる^る後^ごの^の月^{げつ}

⑤八 文^{ぶん}合^がふ^ふく

又^{また}う^うる^るの^の人^{ひと}は^は保^ほ同^{どう}坊^{ぼう}
古^こル^るふ^ふき^きで^でる^る臺^{たい}る^る干^{かん}屋^{えつ}
か^かイ^いと^とる^る近^{きん}久^{きう}伯^{はく}父^ふの^の釋^{しやく}
兄^え出^でふ^ふ素^そと^と拙^{せつ}本^{ほん}賣^{ばい}

⑤九 請^{きん}合^がふ^ふく

は^は以^い名^なを^を誘^いふ^ふ計^{けい}
あ^あ家^けと^と去^きぬ^ぬ京^{きやう}深^{しん}座^ざ
坊^{ぼう}の^の保^ほ人^{ひと}が^が消^けえ^え線^{せん}糸^い
去^いぬ^ぬる^るあ^あれ^れ脊^{せき}叩^{くわう}く^く花^け車^{しや}
花^け車^{しや}が^がけ^けく^くら^らと^と差^さ子^しの^の勢^{せい}

耳より為王居正く仲在

百 上へ小上へ

隙を有て去ぬ柔才子
虎忌や鼻の可ぬ素

百 うちとけふふ

系統び一喰ふお母の又
おの機をへゆ仲在
母の根へ足利薙子

百 うちとけふふ

は世へ戻を来乃沙

知家公へ状を出スを割

系ぞ出へ笑ふ毛剃

百 上へわけて

ううさひが泣く江戸風俗

ふ家り花角力泣く細子

子の親人泣く搬治や後家

並登店出れさ歩備り

百 うちとけふふ

足の子辛夜イ門曲る

あが子ヨ去ぬ源左衆

床で酒買ふ翼の伝又

⑤ 吞上げて

菓子屋松比の多イ葉葉や
もの定る目貫彫

⑥ 真 吞込んで

紫り玉うん切レ宿老
芝居へそれる後家の供
一ト鞍ふやも歌仁る士
藝子へ掛もやる吸屋
白服幕よ去ぬ無度

吹キ替へお化の鳴るガ子
妹仲居が替りる砂
合イニ味分活を友のふる
新加てきる厄乃友

⑦ のトが毒ひ

孫葉漬子葉屋お母
二夜の歌持ッる且那
徳な米泣く土仲士
吸屋が替る大蛾燭
まろりけ泣く藝是函

借りきせる多々座作り

頁 二合五ギ

喰ふ座りが喰ふ茶漬

雪隠をもち泣く日産

惚人の別ウなるお亦

頁 くらり縄も

龜井出ろる士感トる僧

裸も景の無火方

居いの精を笑ふ茶

兄の勝負娘に参る妻

草 くらり

月費の日延めく奴

笑う状の名へるる士

口入の出する渡銀主

月柳の意と笑ふ娘町

草 くらり

能いき女出久三

内々たふと洗ふ丁児

門入まる老女房

月和泣くも竿敷坊

ハツ時斗とまぐり習屋

① 人ぞふあり

汲ム糸の石より油賣

与所行キ淋山懐函

素麵も歯ム政古丈

灰至飯にあらは後者素

② 今更歩行

年礼養子がいと天窓

後將子やルふ景氣職

賢との喉より囁り小云

品玉よりぬえが贅

③ 昔かき

斤鉄の金い沙を機

按广へ切レる 納ね織

高の生くる来る萩の葉や

④ 噫ーて

依又、宣森と記る後家

名灸の吐くすくま

矢ふて仕廻るいふは雲

⑤ 素より

芝居く仲居多し仲居

眼鏡のまい大妻以

翌日の軽月も揃ふ妻

芝居家様を祝せらる

ハ又奢る病後る士

⑧ 約束し

換所と云ぬ帽子簪子

嫁沙汰河のふれ息子

安物中海ると云ぬ貨や

⑧ ヤレ別やの

肉の系漬と喰ふ惣屋

頼の納まるふつと後家

惣屋を借つと教龜甲の眼

旅宿を戻る店も代

取つとみお母へ戻る一突

エテおとる未識ひ

⑧ やりし

鼻がちくのゑふる士

又又仕るせうな屋果

肉の菜多し惣や喰ふ

這出まゝ歌ふ連るあ

⑤ 山のやうよ

冥へまゝ麵きつゝ母

二月の三宝喫ふ風呂屋

利函沙汰を焼録函

蓮葉饅頭紀列台屋

店十の菰入り炙り木戸

⑥ 局遠る

お習ひ下推泣す猫

好の上への深ッゝ柔沙

ほ家親と為し舞仲人

晦日柔漢喰ふ喰屋

⑦ 真中うゝ

結の魁喰ふ美且那

舞子が攪ゝせ田土産

年ぬのえゆる楽太鼓

海巾着ゝる未玉ち

⑧ 三士が来る

え虫飯切つ孝行曰

寄川女がやぶるあけ愛

喉の橋 買ふ糸の所

⑤ てア左やう

持った手放を過り者

才子へ服と信生花の沙

手放を流し上る贅女

呼ぶ教書と賞と書

さうして文ヶ先おどるま

⑤ まうさういやん

小便 大汚ッ 供ヒ丁児

齧めぬ虫と猿也ー

名づく子ね高き且那

幾月映 心士の子

⑤ 臨海あり

親又病持チへ狭小情

店友が教書ふつはあ

お泰上もやうへ苦な又

⑤ ぬせうぐよ

花柳へ掛る小便 砂

奴がふるハ外 檣

素が傘借入能女房

⑧ 舟より

足^{ひき}の幸^{しん}な^なある^あ飛^ひ梯^し
聖^{あす}の良^ら夢^むを^を知^しる^る毛^け剃^{そり}
仕^し事^じ志^しる^るある^あ我^わ情^{じやう}
新^け陳^{ちん}の^の比^ひより^{より}清^みく^く
大^{だい}船^{せん}を^をの^の傳^{でん}母^ぼ丁^{てい}児^ち

⑨ 舟より

お福^{ふく}仲^{ちゆう}居^いと^と破^や上^{じやう}法^{ぽう}沙^さ
糸^{いと}會^{かい}悦^{えつ}ぶ^ぶ去^いぬ^ぬ雙^{さう}屋^え
布^ふ袋^{ふく}の^の表^{おもて}を^をお^お扱^け祢^ね

溝^{みぞ}より^{より}人^{ひと}なり^{なり}括^{くわく}り^り猿^{さる}
葵^{あひ}の^の枝^えより^{より}柔^なふ^ふ婦^ふ

⑩ 舟より

お針^{はり}世^せ話^わする^{する}ち^ち八百^{はち}屋^え
隠^{かく}居^いる^る人^{ひと}を^を白^{しろ}歯^はを^を子^こ
居^いる^る人^{ひと}を^を誦^{じゆ}讀^{どく}を^を伝^{でん}又^{また}
お人^{おひと}へ^へ係^{けい}を^を呼^よび^ひ連^{れん}
接^{せつ}を^を伝^{でん}を^を後^ご家^け
おお^お福^{ふく}より^{より}と^と遠^{えん}近^{きん}者^{しや}
帆^ふ下^げ風^{ふう}新^{しん}川^{がは}菱^{ひしやう}垣^{がき}より^{より}至^{いた}

眞 二タ五よ

子と物とあはれと信女房

為丹の厚い寺八百屋

喰えりか持ッゝ塩

口入か通ふ後家銀主

眞 あり思ハ

寂悟れとる鈍坊主

首の否前なれどり腰

短気短多来りとお秋

蜻蛉と足が釣るとんぼ

拂ひの端なる新官屋

巾風へ見える樹々の雪

柔席あうい新口入

兀と来りかチヤル草履兄

瓢へ迷ふ前後所コ

眞 ありとる

鞠へお蹴の活る平

我る古学所へ来る子傳母

三毛へ鯉を減しと毒

汐子の悦み涙芝居

夏五 おーいさる

莖洗ひきぬ出入り婆

借り終身武士と爲し捕戸

花月和泣く老毫髪結

むぐん豆腐屋づつかぐ縁

利キ惣嫁の去又發次郎重石

長つ居りキが借りて店

夏五 こつもせび

一枚着るとお返し戻り

々々の聲も能く男

一ッ家へ来盡る救函

素人組まがらる片組

夏五 こつもせび

煎斗り洗ふ義士更替り

針仕事する膳泊あ

流り完帳か泣く森あ

下針助ける乳黄ふい

嫁仲人する動化婆

夏五 おーいさる

丁児の天宮移る助ケ

十夜の尻と搔る時

鼻をいかにかきよふの友

万葉へ神抱き返く妻

とりあはれまんご糊貰い

眞 ちるきり

改日 風呂屋がさうと堀

衝立 虫と木綿買

飯主 六季の転語お

眞 別

何んか云いぬ大 ちん

子抱チが入る ちん

灸上戸なる ちん

祝く子進 ちん

眞 是切りとや

市井 燈とちる ちん

日が 状の来と ちん

赤い 麻と ちん

大名へ ちん

眞 是が ちん

賞し 機と ちん

風^{ふう}足^{あし}贅^{ぜい}か 池^{いけ}一^{いち}先^{せん}

火^ひを仕^しる^る者^{もの}が^がりや^{りや}約^{やく}

族^{しゆ}での^の者^{もの}隠^{かく}ひ^ひまる^{まる}実^{じつ}

系^{けい}名^な不^ふ足^{そく}が^が叩^{たた}く^く足^{あし}

鼻^び 夜^よ多^たで^でも

か^かい^い屋^や多^たふ^ふ枕^{まくら}足^{あし}あ^あ

冷^{ひや}一^{いち}一^{いち}ジャ^{じゃ}い^い派^{はい}を^をさ^さる

新^{しん}衣^いと^とす^すく^く未^み衣^いを^をさ^さる

鼻^び 照^てり^りと^とされ^れる

色^{いろ}の^の白^{しろ}なる^{なる}を^を納^なめ^める

鼻^びの^の形^{かたち}ん^んど^ど物^{もの}

ふ^ふき^きぬ^ぬる^るを^を納^なめ^める

鼻^び 手^てに^に度^どけ^け

足^{あし}の^の棒^{ぼう}を^をか^かる^る日^ひ銭^{せん}貸^かし

泣^なく^く子^これ^れど^どい^いま^まを^を納^なめ^める

年^{とし}の^のい^いや^やの^のお^おな^なを^を納^なめ^める

鼻^び 傳^{でん}授^{じゆ}の^の物^{もの}

出^で来^来ぬ^ぬを^を納^なめ^める

勝^{かつ}の^の者^{もの}人^{ひと}へ^へチ^ちヤ^やッ^ッハ^ハ派^{はい}

早^{はや}ハ^ハ派^{はい}チ^ちヤ^やル^ル實^{じつ}屋^や

皇出くろへり

を不も待ッ花ぐり

付テ虫は惚と沙殿笑

原状敷りる木戸の鼻

そふきく孫の爲主

未所争りる煙と打

床力の少さふ懸掛合

魁が汗くふ望芝居

皇天物よなり

俊者の家号りふあ

を性の減ッはへお

お母の居ッと糢朧

妻中れ鼻の敷ひあ

皇ものひで

因義軒の産りす百姓

寡がらくな燥けし

子の脊中か刺刺祖文

禿は眼根をえり一弁

るの尿ふむ就後柳子

年し乃隠せぬ大妻か子

鼻丸 せんがうで

買せが雪ゆきして春果はるこの疔

鼻はな先さきキ之これテと生業きぎやう屋

砂糖さとう屋へちんを引く子兒

下女げにょは遠とほは且かつと黒焼くろやき屋

麵うどんの糸いと漬づけ持もちてる事

焚くわぬさへ屑くずと出でた事

坊主ぼくし落おち寺屋てらやは減へる机

鼻はなは外ぐわい療りやう吸くぶ新しん刻こく

鼻丸 せんものい

凝こるぬ淨じやうるりおむ友

素すがあらう家具かぐ講かう入いり

喉のど屋へ粒つぶむ麻あし病びやう氣き

忌いれへ贅ぜいな先さきの医い者

百五 百いん

おやへきる朝あさ更さらふお家

踏ふみりの牙は子のゆく種くさね古

入いれ落おとを病びやう苦く痛いた

松まつは夜よ登のぼへる月の家

櫓うの極ごくまる於お母家ははや持もちち

夏三 夏三 夏三

糸へるゆるお金いふ
を服がめく新虎島
助へたむと膝毛刺
質屋の一軒あふ目も
市で取あへ官り人

夏三 夏三 夏三

糸糸魚の兄おまふ
梳篦へちやんき仲右
さこお孫の中乃玉糸路

お金いふ傘で去るお比や
売物えきお店り

夏三 夏三 夏三

後家のもふおは家
親仁きみか持ぬ端
笑か笑くあふ一お境
耳の法ききききき
糸の飯喰ふ小百姓
馬新造と森ききき
續くあききききき

百五 味付ケテ

新改易へ納す母

登麻と紀と親登噪

二十九と作と後家の手

百五 まくや

幾と受名の附く建士

整昌の足る八百登座

おりの積る五日の後

さくの格ぶ東福古

おるおつた庭乃景

百五 集ッテ

系せんへ麻の子とむあ

淡へ礼さる淡角力

屏風の喉ま賀祝以後

南瓜おまる地舞系

初日のさまる勅進元

子よるに付ける換場

人買ひと納ッ油締

噪の気参る控比者

一腰端もな堀出ー貫

夏九 夢ごとくハ

母とふらふ姑の夢

彼岸の夢とふらむ母

又の粹愛と又の夢

去聲と助成る士

夢が瘧疾と小刀屋

夏九 夢先見く

子安地夢とねむ夢子

救医の春と夢又夢

出る夢と夢とねむ夢子

及乱細工とねむ月夜

二重目狭む寺花見

夢が遠へる夢と夢

夏九 サアたまふね

夢が振る夢と夢の夢

夢が夢の吹く夢

左被拵て夢と夢

怪気の夢と夢

友夢子親が夢と夢

夢が徳利へ夢と夢

近々立たる家の跡
追つて病犬立つ孫切
昔夢一指と折つてみせ

頁二 さやい

忍びが新に松木の受
代が虫切りに入園らん
盆まつり 弟嫁
坊主同士の桂川

頁三 孝じとや

おれが嘆く萩の物

左方のまゝ 明き商家
志げりの切しと心り
返る対して切りやめ
花立てて去ぬる仲士

頁四 さるもの

掛九りのゆき講釈場
本居の美女もそれる床友
たまへんせらるる本
剥きと友がとせらる
員男が抱と愛慕

百益 さしうりまき

柳元 肋ケのやむ久三

とや 古産の出せぬま

兄とり 近ぐは二日食

泰の強み 了無憂 医者

百益 さしうり

無慶へも 塩菜汲を 煮

お板うむ 刺傳に

八百やの 夢見はる 女房

百益 三人

雛へきり 虫の 涉り仕丁

虫の子ヨ 出来さる 中子

由良殿 親を七 辰目

卵の 揉るる 湯調鉢

流し 洒ね 以 妻に下女

常本 居ふ 了 姉

百益 左 振をいナ

あ 屋に 虫ス 穿り下女

お 針が 差る 深虫

あが くり 度 以 系 車

夏 重むおつて

花車の子孫な恙且那
目利し舌と舌く焼刃
汗あつたる足袋やもる
おと会下白あふ下戸

夏 ぎくとしすぐ

うがう鼻のある長家
めヶ店又安次毛剥
猿羽えさるんせお沙
稲荷へ来る移り乳あて

夏 ぎくとしすぐ

供の添へるお易者
通ぬおつて素改連
おるおるおるおる
兄のいふおるおる
おるおるおるおる

夏 ぎくとしすぐ

江戸の冷やうおるの母
おるおるおるおる
おるおるおるおる
おるおるおるおる

勝負付ヶ侍ッ橋仲間

夏三 疵か泣き

姉は果のまゝ謡の所

衆貨歩抄よ息子の世

八尾へ嫁入りさす雜や

一チ輪廻を前車加さ

夏三 疵見せろ

本玉自惚まる下ッ屋

さんぞ咄一の入六部

生テ梨子せむひ百やれ子

愚の自惚とまる毛利

夏三 氣込返イロ

臨の廉おぬんごま

西瓜の取利さる桑雲屋

又の月言ハ元弁さへ

桜見活さる女ナ医者

夏五 夢キや何おも

子子結る夢り候く子救

夢うまで思ふ人並屋

おぬきの人下子雲

夏六

こゝろにつき

嫁へ氣がひく夕時際

女房のまじぐる下詰の罷

物速にひく儒者の依母

まご皮膚病ぬ酒や夢

内談の才子もまじるや

親仁の年のおひし小

恙世乃欲も出る龍業

まゝ芝居をとる連士

親の恩しる役生り

夏七

きく出く

巢へ角は振る山の井

掬レ薔の勵み咲く仕歩

本卦を端よく移す救医

利しと移り咲く榎屋

約りへ毎日実る日る

内の月出来ぬ小仲士

みまもるへつりさめる職

教龜甲の素む彩賀屋

子飼へ衣袋法る壺屋

夏 さんくと

足形と作紙と丁児

延紙と包んである家賃

組立のよい海吸と昼

年しの濃紙と漆と仲居

夏 仲居とあつぬ

物置の夏男匠とお母

雀の巣とつりや婆

十月きの汐を操る吏

を枯せ紙を本孫実

夏 けうぬが勝ち

夏 ちりへるまきと按広

毛羽の日切り笑と桑屋

大病へ病氣をよ救急

奉仕へよる士の子

夏 けうぬが勝ち

内服借り泣く儒者

お舟お即ち初日幕

昼網泣く娘を夫

たのりよきて破上質を

ニタ歌のりる骨の付さ
香源を愛する友

③ 指さるる

姉は恥ぢる雛乃を

子の破換泣く露屋

是乃上る出入り按戸

子は養仕の末社祇宜

自立明くする傘屋

牙上は持を振るふや

か針が刺さる所の雪

③ タアカ

親はぬ猫は涙の易

芝居へ證初めは且那

何雨より緘の下りぬ

④ 眼をひく

姉は仕ふて楊弓屋

聲は惚れさへ傑お山

たなむをばあふや

云説ふ語をさうと

家主よりやういふ家

百五

女まゝして

草鞋もろくを被歩チ
美足の下なる新並屋
仕立テ垢もゑる脊負
涼に掛たが出と桑店

百六

兄もろく

鮑ぶ教の兄えぬ飛
剣と式百の唱り毛刺
出ど一板へ流し季氏
又と息吹く眼利武士

百七

兄もろく

毒が辛気なる白髪
お牛雨とやなむお母
参人へそらるゑもろく
長門の妙と知る丸子
うろけ坊あやうきは下女

百八

屍ころむ

老を海の端へ戻る老
十月は産ム坊屋囃
無理の盃けり

草外まね足探をま
女人堂試へる女ナ
奴が通る麦乃畦
桑漬喰てる政目燕子
菊止鞠儀が笑口と梨子
かま生キ金魚うろ子倍母

夏九 志がまろく

何く隣隣が知る事
長家な流し増し莖菜
揃うと遠入るのキ橙尻

大場入り名所辻喧嘩

夏十 沙そのすう

場あつたよち車
深人があまるあまらひ
急所とけりふ因来屋
玄んど柳屋を笑ふあ
揚ケの目子仕立ふ内の子

夏十一 志がまろく

増禮の急ケぬ事知子
けさハ森五人笑ふあ

負ケへき婢誘う毛刺
杵子の喉へ絆か酒屋
初十日景気とり生例

夏三 辛辰やノ

切者か誘りつゝと妻
伯父と云絆やと幾人
旦那共顔さん下向の妻
就津深屋と云ナと妻
熊沙送ッて来々仲居
豆蔲折つて矢張の嫁

ツイ誘うゝ来々燕子
仲居が誘ぐ底友の状
坊ン歩り来々中世居

夏三 辰ぬり

子うもあつて焼茶屋
下着の指い女画者
伴信とすまてゐる小僧
又墓掃除と云奴

夏四 辛抱ぢ

京の町連き相次礼

大凡中兄等々々々二日

漢書隠修の猿廻ハ

才子へ家へ来り出雲

百五 志はし

門松を掲るや

上菓子の何る程の社

あそびをうめり

百六 正月

貴人へ今どい舟玉屋

夢儼々ある本孫貴

長尺入梅後云仲士

萱菜と近江儒者の素

外科の礼後自前隠女

楊枝の壺する鯉す

百七 意は

以てへ元のるより

素衣を衣へ来り麻呂

了具の端ふか

才子も梅の遠る

梅より来りま

③ エラ 呵ら

城^あをてゐる鉄^{てつ}匠^{しやう}んが

ふふふ^{ふふふ}鉄^{てつ}匠^{しやう}を^をいふ^{いふ}は^は遠^{とほ}く

ふ^ふ叩^{たた}き^きる^る男^{おとこ}と^とあ

下^{した}向^{むか}の^のあへ^{あへ}ま^まの^の像^{さう}を

③ あつ^{あつ}か^かろ^ろが

海^{うみ}の^の通^{とほ}いの^のま^まの^の毛^け剃^{そり}

ふ^ふと^と世^よ帯^{おび}と^と見^みる^る伯^お父^ふ

ま^まへ^へろ^ろは^はあ^あう^うう^うる^る士^し

張^はつ^つと^と火^かの^の回^{まわ}る^る士^し

長^{なが}つ^つ屋^やの^の人^{ひと}と^とあ^あつ^つる^る友^{とも}

似^にぬ^ぬお^おの^のま^まを^をあ^あと^と上^う那^な

い^いと^と何^{なん}か^かは^はあ^あの^のま^まの^のま^ま

③ エラ 屋^やの^の

ふ^ふ代^{だい}と^と隠^{かく}る^る表^{おもて}方^{かた}

嫁^{よめ}の^の夫^おと^とあ^あつ^つる^る持^もち

角^{かく}力^{りき}の^のあ^あつ^つる^るま^まの^のま^ま

ま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^ま

白^{しろ}湯^ゆの^のま^まの^のま^ま

あ^あの^のま^まの^のま^まの^のま^ま

言五
五十六

禾^ゲ家^ヤ子^シと^ト子^シの^ノ云^{クモ}

あふりふふとーとふ子

子^こ動^{うご}入^い數^{かず}全^{ぜん}と^と拍^{はく}ッ^ッ佛^{ぶつ}沙^さ

後、
倭に
柳

三
初

外母の去来^{いふ}を^{おも}ふ

仕
世のふる
祐
業や

糸^{いと}の屑^{くず}下^{した}へ糸^{いと}漬^ひ

彼^い處^ちの
入^いり^やて^下る^下者^下も^下あ^下ら^下ず^下

婦の嫁入と浮るる屋

招子附人が呼ぶ聲子

意引

素下春^の鮑^{わかに}泣く^く牽^ひ改^こ

月のふり
はる
はる
嫁

上へ町ちやうの井戸いど智ち日ひ雇い

仇 業 乙 子 分 別 業 子 別

貢
正久

辰の年とさへ仲々

繆ミウリ
 針ネサツ
 上
 大ダイ
 ヲヲ

脈の河の掛^つ去る花^{ハナ}を
棟梁^{とうりやう}が交^まする^{まじ}るの盃^{さか}
はる^{はる}隙^{ひま}ぐく^くる糸^{いと}漬^{づけ}
端^{はな}の糸^{いと}店^{みせ}へ賣^うる^る官^{くわん}屋^や
出^で店^{みせ}の才^{さい}へ^へる^る記^き意^い
三 竟^{きやう} 玄^{げん}や^やし^し
糸^{いと}次^じが官^{くわん}と^と並^{なら}ひ^ひ脊^せ負^お
糸^{いと}を^をへ^へる枕^{まくら}牧^が快^や
鼻^{はな}入^いる毛^け刺^さ足^ある^る刺^さ人^{にん}
お^おぐり^{ぐり}の^の心^{こころ}へ^へる^る娘^{むすめ}

三 章^{しやう} モウ^{もう}志^しめ^める^る
弟^{あに}十^{じゅう}ヲ^を少^{せう}く^くと^と大^{だい}仲^{ちゆう}士^し
二^に階^{かい}く^くま^まく^くる^る戎^{えい}
会^{かい}款^{くわん}の^の酒^{しゆ}を^を喚^{わん}ふ^ふ毛^け刺^さ
隙^{ひま}の^の四^しッ^つゆ^ゆく^く丁^{てい}児^に
々^々う^うる^る毛^け刺^さふ^ふ大^{だい}仏^{ぶつ}
三 章^{しやう} 玄^{げん}少^{せう}く^くと^と玄^{げん}く^く
東^{ひがし}風^{ふう}何^{なん}か^かい^いぢ^ぢる^る出^で合^あ糸^{いと}
年^{とし}柳^{りやう}釣^つり^りへ^へ懸^かる^る細^こ糸^{いと}
聲^{こゑ}の^の氣^き仕^し込^こめ^める^る老^{らう}老^{らう}

三章

もよおさめ

爛

爛

爛の河の上を

売

売

売で床る丹あま

諸

諸

諸へ式集より教送

ち

ち

ちけへかゝ抱人の子

母

母

母へ倭る出後二り力

三章

悔

悔実より

干

干

干おや去ぬ北妻武士

る

る

るまゝとる大妻氏

荷

荷

荷るゝる親仁る士

三章

おのえりり

夜

夜

夜まゝ泣くおぬる

る

る

る株の消へぬ新味を

疳

疳

疳癰蕪子より整甲屋

組

組

組まの義より初荷る士

死

死

死瓜の皮より照るる

る

る

る士が汚るる文を株

三章

くへ

子

子

子の砂指へチャル仲士

実

実

実の跡の英吹くより出

沙^{しや}匠^{やう}役^{やく}者^{しや}が^が咄^{はな}く^く目^め安^{やす}

明^あ々^々と^と茶^ちや^やル^ル勢^せ語^ご座^ざ

ち^ちん^んと^と児^こ笑^{わら}ふ^ふ輪^{りん}巻^{まき}

換^かお^おた^たん^んと^と五^ご糸^{いと}糸^{いと}屋^や

⑤ お^おハ^ハな^なづ^づと

つ^つぬ^ぬ鯛^{たい}買^{かい}ふ^ふ茶^ちや^やル^ル隣^{りん}り

一^い子^こ兄^{あに}あ^あへ^へ賣^うる^る目^めが^がう

掛^かへ^への^の出^で来^きる^る灸^し灸^し所^{しよ}

失^しつ^つろ^ろう^う誘^{さそ}う^う契^{くわ}の^の出^で来^き

振^ふつ^つお^おあ^あよ^よ引^ひく^く蕪^わ子^こ

宿^{しゆく}老^{らう}も^もと^と通^とる^る汁^{じゆ}も^もど^どろ^ろ

你^{めい}ふ^ふハ^ハお^おい^い後^ご家^けの^の髪^{かみ}

⑤ も^もよ^よ能^よろ^ろ

き^きる^る泣^な連^{れん}へ^へ腰^{こし}下^{した}口^{くち}を^を母^{はは}

み^みろ^ろう^うの^の豆^{まめ}へ^へ消^けを^を自^じ立^り

戸^と棚^{だな}の^の端^{はな}よ^よけ^けろ^ろう^う

た^たろ^ろへ^へ掛^かろ^ろう^う灸^し灸^しけ^け

塩^{しほ}の^の状^{じやう}は^は伯^{はく}父^ふの^の後^ご

素^すへ^へ眼^めろ^ろう^うと^とあ^ある^る良^よ智^ち子^こ

火^ひ船^{せん}へ^へ喉^{のど}を^を咽^のぶ^ぶ居^ゐ職^{しやく}

③ 眞世話よりぞや

大司干ハチヤル雙のれ
系破り居るは沙の母
華よりめる九人店
陸子の脊筋吹く毛刺
柳え嵐茶々 儒者

④ せがすれ

粹又ハ零子店地
能ハ程に出し又
親孝ハハ礼儀

破丹坊儒者が拍子筆

紗糸笑ふ糸る子士

⑤ せんく末あが

坂紗と昇笑ふ

海老屋に繰と信る紺切

あけ棧橋より雲野

日光のかり以押へら

雙屋連泣く糸糸

⑥ せんく

井より世話甲斐多し男

教^{おし}へり仲居^{なこう}が吞^のめる酒

藝^{げい}子^こ立^たておるか^かこあ

お年^{とし}の日^ひあるま^まあれ下女

③ 昇^{のぼ}り仕^して

お母^{はは}へ母^{はは}が場^ばを痛^{いた}ま

か母^{はは}う^うおと^と算^{さん}ム難^{がた}矣

③ 脊^せ々^々々^々

之^{これ}テ^て云^い候^{こう}坊^{ぼう}う^う總^{そう}古^こ屋

子^こ息^{いき}枝^{えだ}を切^きる仲^な士

机^き系^{けい}氣^きな^なも^も中^{ちゆう}り^り易^{えき}

後^{のち}ト^と仕^しお^おお^お中^{ちゆう}り^り息^{いき}子

大^{だい}工^{こう}の年^{とし}を^をけ^けむ嫁

櫃^び屋^やが掛^かてるを^を被^ひの沙

③ 少^{すこ}し^しゆるめ

癪^{さく}ものさ^さが^がけ^け為^な表^へれ^れあ

突^つが仕^しう^うけるお系^{けい}人^{じん}取

店^{みせ}お^おろ^ろ一^{いち}ッ^っ粹^{すい}隠^{いん}居^ぐ

表^へ取^とも^もゆ^ゆく二^にの^の勢^{せい}り

入^い梅^{ばい}へ^へ氣^きと^とそ^そう^う被^ひ乃^の所

舞^ま入^いり^り髪^{かみ}と^と結^{むす}る^る表^へ取

③ 眞 必 答へ

是へ這入る二夜目の乳

一室中泣くはちと後家

止は思て来ると食

扶抱と貰ふ事

とけあふ

代抱ふ婆もあけ

草吸ひ次ぐ才の介母

菜種のお板うる穀や

吸居が抱ふ能い長季

③ 眞 助人がまろ

加減換あふ辻田楽

七夕のまろむ廓ちや

物笑ふと舞子の状

日雇が物戸る笑や仕る

磁へ油取のちるぬ母

③ 眞 京へ世々

三味線おも持ッ息子

いろはあやが春を
虫目くの娘

海屋陳馬賓送

羽附磨立鏡

近刺 一冊

日選者

折句松竹梅

近刺 一冊

風道場升六海

流行百家百集

癸梓 四冊

絃曲

舞下少人

小本 一冊

以書の爲時侍りの爲の唱言や
あまうと集めあふは後をいさぐ
拾遺丸席の具は傳ふ

文化九申年

大坂心春橋筋南入宝寺町

書肆

塩屋平助

神易選

小本 一冊

此書の日本の爲の法うと天竺秘命天竺
至今二律のつくりを後人伝ふなり
乃との書要編成後不ふの所記事
俗人変人秘立失物病人醫と求ふ方
一それ道徳のけ書を心で信じて
是乃の書要とんや其書とてん
しを伝ふるなりと傳ひ伝ふなり

大新増糸新所

宙世琴三味線と調へるをの長う

とあすもまをけまふのけの影あ

とあすもまをけまふのけの影あ

とあすもまをけまふのけの影あ

とあすもまをけまふのけの影あ

諸國石版圖と報告 所山田 全六冊

日後篇 全六冊

日三篇 全六冊

此書は諸國より石版五石郷人の名付るを
拾ひて諸家秘蔵の書記及び小紙先を
集めて採収る諸名石版品集りて全一冊
且先年小繁先生諸國紀行の抄あり
如く不思議のまこと其後云然し諸名
家の秘伝と奉てまゐる石版物多き
其の收り人多に此書を刊せし居り
諸國紀行の他して名産名物等の
不思議を知るの云なりを多の西紀紀行
紀行といふ云よりと面白し故に
三篇を既版し日く既行海内
りる

茶道早合点 師匠石入抄 全二冊

茶湯をまゐる人け本と見れば茶湯を
師匠たりしてより抄を教ふるに茶
繪圖を八其月名通具の云へるもの
如く若葉茶亭主の方の奥儀を
悉く記し初学の所方なり
合点の抄なり茶通のものと要集に

和漢袖玉年代記 全

本朝の年代唐土三皇の今代
と日本國中作は佛國の儀儀公卿諸
諸祖岡山智將名士のま漢の武造の
活世位官を載て其外未く附し不思
ありに集りて集りて集りて集りて
集りて集りて集りて集りて集りて

獨纂鑑

清書堂早堂用

全

古事類聚一書用早堂用五回地坪割樹の法
を東南可見其外しゆに三刻方後地坪法を
いふはして洋の法にまゐるいふにいふと
いふとまゐるいふとまゐるいふとまゐる
いふとまゐるいふとまゐるいふとまゐる

品物 世事談

全五冊

凡そ地同き所は其同ありゆへ蔵付人
は腹飲食は値は物産は多し
門部をさうら幸物なりちうさ家壁
いらるに委しく記とい書をいふに
のり結おれ安にありいふに書なり

大坂書林

心齋橋南久堂寺町

高橋平助

板元

大坂心齋橋南久堂寺町

塩屋半助

大成折句袋

永年中書全
大寄 全一冊

續折句袋

新板 全一冊

折句室

全一冊

折句袋

全一冊

同い草

全一冊

折句駒じう入

天明四主新撰全
大寄 全一冊

折句秀詠評林

十五折句高判當時
点者の取おれに

場附集一冊

場付 一冊

同じく此系一冊 同後篇一冊

新選場附集あふ

七宗近高判一冊
天明三年終板

笠附

大明四年新撰
秀吟八寄全二冊

鬼貫弁句集

附錄又之賦
全部二冊

弦曲粹

初篇二篇一冊
重世のりやう集

増補系乃

卷三味後考平八寄
秀吟八天明大新校

大成折句庫

寛政二年新撰
秀吟大考 全一冊

笠附

青とくを法篇
寛政二年新撰大考

同新

全

折句

全

折句箱

秀吟大考
新撰 全

折句

市門とぬれぬまは集
方寺仕事ゆのりやう
力大考秀吟大考

折句

法大考秀吟大考
秀吟大考秀吟大考

折句

法大考秀吟大考
秀吟大考秀吟大考

旧大全

折句

集法大考秀吟大考
秀吟大考秀吟大考

折句

集法大考秀吟大考
秀吟大考秀吟大考

折句

集法大考秀吟大考
秀吟大考秀吟大考

折句

集法大考秀吟大考
秀吟大考秀吟大考

折句題集

快園大奇撰句より吟
試みるはかきて金八割

折句式大成

此書は作者にまじりて評と
しけ折句をたふさず集功
をせけいへ依に吟詠を

折句道志

折句のたふさず集功を
せけいへ依に吟詠を

折句集

折句のたふさず集功を
せけいへ依に吟詠を

新折句大全

折句のたふさず集功を
せけいへ依に吟詠を

後新心

冠附文化新板
大寄

早義田

場付五絶新
版

武玉川

江戸流り点々たる
くみまくのふさふさ
折句選吟の傍り十八冊

同全砂子

一冊

折句杖

寛政 中
秀吟

全

折句種

新板

折句柱

新板

折句題林集

享和新板
大寄全

折句いろは

文化新板
大寄

笠附小柴垣

文化新板
全

狂奇秘心式

同々庵了山著
誦方り重也

全

同無心抄

全二冊

同大和松達全

折句秘意

五流者氏選

折句秘意

急す此

俳諧七部集増補
芭蕉袖草紙

比屋巻校
全二冊

第一世の諸国への旅の世のこころのしるしを主の次
のしるしを主の次
のしるしを主の次
のしるしを主の次

入門心風 狂歌品
浪花桃李園
全一冊

画本野山錦
一名
伝説名の枝折
全二冊

折句趣向帳
折句は付る成へてなるといふ
変化新振
全一冊

折句初心抄
全一冊

誹諧
場附呈附
新板出来所
全一冊

南久宝寺町心ざい

板元
塩屋平助

